

第14回「日本語大賞」

テーマ 私が^{だいじ}大事にしている言葉

一般の部 優秀賞 受賞作品

「二十余年後の返信」

英国
倉葉 明子

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

九月に暦が変わると早速に秋風が吹き始める。イギリスの夏は短い。そして駆け足で冬がやってくる。すぐに今年も夏の服をしまい、またあの純毛のカーディガンを取り出すことになるだろう。古くはなつたが、着込むごとに愛着がわいてくる、私には特別なカーディガンだ。あれを求めたのはもう二十余年も前、母との旅先のスコットランドのことだった。春を告げるイースター（復活祭）の頃。しかし春とは名ばかりの、寒さの残る四月。母と私、母娘二人だけのスコットランドへの旅は、凶らずもあの時の気候のように肌寒さを残した旅となってしまった。以来、二人ともあの旅について触れたことはないけれど、母の心の中にもきつと残っているだろう。私にとっても忘れられない旅。「ごめんなさい」と言えなかった自分が今でも悔やまれる。

当時、私は仕事で英国に渡って三年目。日々の暮らしには慣れたものの、毎晩遅くまで仕事をするとストレスの多い「会社人間」だった。そんな折、日本から母が遊びに来たいと言ってきた。父を置いて、一人で、十日間程だと言う。私は「勿論よ」と答えた。休暇を一週間取り、あと二、三日は母を一人にしても大丈夫だろうと算段した。

母の来英の日、珍しく五時に退社し、ヒースロー空港へ母を出迎え、ロンドン市内のアパートに戻った。一週間の休暇を取る目論見は、急な本社 の 監 査 の ため 二 日 に 減 っ て いた。翌日は母をアパートに残し出勤した。そして、その晩の金曜の夜から週末を挟んで、私達はスコットランドに出かけた。夜行の寝台列車はエジンバラへと走った。私はこの短い旅行の間、できるだけたくさんのお土産を、たくさんのお土産を母に見せてあげたかった。エジンバラ滞在中はバスでネス湖へも足を伸ばそう。

母はしばらく会わないうちに、随分歳を取って見えた。まず歩き方が極端に遅くなっていた。そして「何したい？」と聞いても「わからない。お前に任せるよ」と答える。私は、爽やかに、誇らしげに次々と家事をこなしていた今までの母と、目の前にいる母のギャップに驚かされた。そして、その差を受け入れられずに、徐々に苛立っていった。何か喜ぶことをしてあげたくても、ただ「任せるよ」はないんじゃない？ 私は自分で作った規範の中で母の言動を裁いていた。たった二人の、そして初めての母娘旅行なのに、沈黙が続いて重苦しい気分になっていった。人にぶつかってしまっても、「ソーリー」と言わない母に、私はついに癩癩を起こしてしまった。後で冷静に考えてみれば、英語のわからない母が、いくら教えられたからといってとっさの時に英語で「ごめんなさい」と言える訳はなかった。

スコットランドから戻ってからの三日ほど、母は昼間は一人で近くの公園を歩き回り、帰りの遅い娘の夕食を作って過ごした。イギリスを離れる日、母を空港に見送った。母は、「忙しい時に、迷惑をかけてしまったね」と洩らした。その一言に初めて私は、誰もが通らなければならぬ「老い」の過程を、母も戸惑い、抗い、許しながら受け入れようとしていることに気づいた。私は強く良心の呵責を感じた。アパートに戻り、ベッドの上に置かれた、スコットランドで母と一緒に求めたカーディガンを取り上げると、母からの手紙が床に落ちた。

『これまで貴女は、何でも自分一人で人生の大きな決断をしてきました。伴侶を失くし三十代半ばで海外留学を決心した時も、海外勤務を打診された時も。そんな貴女を私は自慢に

思いました。でも、しばらく会わないうちに、自分の手の届かない世界に羽ばたいて行ってしまった貴女を、寂しく遠く感じました。私も歳を取ってきたのでしょうか。あと何回貴女と一緒に旅行ができるでしょうか。体には気をつけて下さい』

私の頬には涙が流れていた。私達は陽気な母娘ではなかった。私が自分の殻に閉じこもりがちなのは、母親譲りだった。その意味ではよく似た母娘だったのだ。その母が異国の地で、こんな手紙を実の娘に認めた。母が自分の思いを吐露したというその事実には、私は驚くともにも、居心地の悪さと、申し訳なさを感じた。それは奇異なことだが、私達母娘はお互いの感情を露にすることに慣れていなかったからだ。あの時書けなかった母からの手紙の返事を今私が書いたなら、母はさぞ驚くことだろう。

母さん、あの時は手紙をありがとうございました。あれから二十余年。随分たくさんの方がいましたね。突然イギリス人の婚約者を連れて日本に行き、父さん、母さんを驚かせました。海外留学、海外一人暮らし、国際結婚。ごくごく平凡な父さんと母さんの家庭に次々と私が巻き起こした異例の事柄の数々を考えると、その度毎の二人の心痛が今はよく想像できます。外でのお勤めをすることなく、二十歳で父さんに嫁いで、二十一で私を生んだ母さん。まさか、娘がこんな人生を歩むとは思いませんでした。そして、多くの戸惑いがあったのでしょうか。でもね、母さん、私も頑張っていたんです。しかし、どこかで無理をしていました。それをあの時、母さんが手紙で私に気づかせてくれました。母さんとは女同士として全く違う生き方をしてきました。私は子供を生み育てることを経験できませんでした。だから母さんの気持ちが充分理解できるとは決して言えないけれど、人間はみんな、淋しさを持って人を愛するんだなと最近少しずつわかるようになってきました。私の中で少しずつ母さんが近くなっています。父さんが亡くなってからの寂しさにもめげずに一人暮らしを続ける母さん。いつまでも元気でいて下さいね。あの時はごめんなさい、そして今、私に大事にしている言葉を贈ります。「かけがえのない母さん、私の母さんでいてくれてありがとう」。